

同窓生 シリーズ

69



16回生
佐藤健次
さとうけんじ

◆プロフィール

1946年生。東京医科歯科大学医学部医学科卒、医学博士。現在、東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科教授、大学院保健衛生学研究科長、教育研究評議員、日本臨床検査学教育協議会副理事長、健康食品管理士認定協会理事、専門分野は解剖学、自律神経生理学、消化器外科学

昭和20年4月から21年3月生まれの戦中・戦後派の世代が16回生で、男子300名、女子100名、50人8クラスの構成でした。現校舎の2世代前の校舎で、講堂は雨漏りがしているような状態で、他の場所に移転する話が進んでいました。学区内に戸山高校という文武両道の良きライバル校が共存し、校内模擬結果が数回張り出され、成績上位100番以内は東大入学が可能で、1浪が人並みと言われ、4年の受験生活が当り前の頃でした。当時の新宿高校には浪人生のための補習科が併設されており、私も最後の生徒として、4年目も新宿高校で過ごし、東京オリ

ンピックのマラソン競技を歩道で、冷めた気持ちで眺めていたのを思い出します。入学した大学は大学紛争の拠点校で、3度の全学ストライキ期間があり、半年遅れの卒業でした。医学部の勉強は卒業してから学べたということ、後の医療の進歩からすると低レベルであったと感じています。大学では深田久弥の日本百名山に憧れ、受験時代に衰えた体力の回復を図らんと、全国の山々を踏破しました。卒業後、外科学教室、解剖学教室を経て、平成元年に看護師、臨床検査技師養成の4年制大学教育を行うため、国立大学の先陣として、医学部に設置された保健衛生学科に

平成2年に移り、ゼロからのスタートでした。その後、平成13年には大学院重点化大学に移行し、現在、学部と大学院の教育を行っています。

医学部学生の時、最も嫌いだっ

た解剖学と生理学を、研究テーマとし、さらに、自分に向けていないと思っていた教育職になり、学生を指導する立場にいることを考えると、高校時に考えた進路と全く異なっており、不思議な想いがあります。東京医科歯科大学はお茶の水のホーム目の前にある医療系の総合大学で、湯島聖堂が近くにあり、隣接に新宿御苑がある環境と似ております。医療職を目指す際には、知識はもちろんですが、健全な精神と体力が是非とも必要と感じています。現在、自律神経系の研究を行っており、健全な精神形成には出生後から五感に対する感性を培うことが重要で、多感な高校生までにその基盤が形成されるのではないかと考えています。これらの育成に際して高層ビルの立ち並ぶ大都会では植物が重要な役割を担っており、これを人工的な代替えは不可能と考えています。数年前から朝陽バラ会に関係するようになりました。花壇には約80種近くのバラが色、香など個性を発揮し四季おりおり咲いています。その間、病虫害ならびに夏の暑さなど花壇の環境に適応できず、枯れていくのも認められ、医療職としてはつらい気持ちです。各地のバラ園ではその場所に適応したバラが咲き誇っており、現代社会におけるわれわれの生き方を示唆しているように感じています。